



World Conference of Religions for Peace Japan

5
2022
May
No. 511



平和と和解のためのファシリテーター養成フォローアップセミナーでのひとこま（5月8日 栃木県 アジア学院）

こころの扉——「ロシアのウクライナ侵攻により」 杉野恭一	2
学習会「ウクライナ危機の打開に向けて ～様々な信仰を持つ市民の行動と連帯～」の開催.....	3
人身取引防止スタディツアー～海外編～	4
青年部会 公開学習会開催.....	4
青年部会 CommuniHeartプロジェクト第4回プログラムー「わたしと“社会”」…	5
いのちの森づくりプロジェクト「タケノコ掘り」を開催	6
シリア難民留学生受入れ事業 5期生来日	6
平和研究所 第9回研究会／令和4年度第1回研究会.....	7
気候正義のための宗教間会議	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動	8



「ロシアのウクライナ侵攻により」

ロシアによるウクライナ侵攻が続く中、私たちは悲痛、暗鬱、祈りの日々をおくっています。国際社会の分断は深まり、日本を含めた世界各国で、紛争の軍事的解決のための軍備増強が常態化され、加速化しています。こうした現実に対し、世界の宗教界、我々WCRPは何をなすべきなのでしょう？

国際宗教系人道NGOはいち早くウクライナ避難民に対する緊急人道支援を行ってきました。また、ローマ教皇やWCRP国際共同会長カンタベリー大主教は、ロシア正教会のキリル総主教とオンラインで会談をもち、戦争の即時停止、人道支援、恒久平和の実現を訴えました。

WCRP日本委員会特別会員
前WCRP国際副事務総長
立正佼成会学林学長

杉野恭一



キリル総主教は、府主教としてロシア正教会の国際活動を担っていた時代にWCRP国際役員を務められ、私もベンドレー前事務総長とともに、3回ほどモスクワでお会いしました。英語を話し、国際的課題を熟知した人物でした。WCRPロシア委員会（ロシア諸宗教評議会―ロシア正教、イスラーム、仏教などが参画）設立にも貢献されました。

それと同時に、キリル総主教は、今回のウクライナ侵攻を正當化する思想である「ルスキー・ミール（ロシア世界）、すなわちウクライナのキーウをその歴史的、宗教的聖地とする大口シヤ主義の信奉者でもありました。共産主義政権下で弾圧を受

けてきたロシア正教がプーチン大統領のもとで事実上の国家宗教として復興し、確固たる地位を与えられます。ロシア正教会は国際的な組織であるWCRPやWCC（世界教会協議会）のメンバーとして参画しました。

戦争終結のために世界の宗教界が果たすべき役割、とりわけWCRPに課された役割を考える際に忘れてならないのは、「ルスキー・ミール」の背景に世界宗教史に関わる歴史的現在が横たわっているということとです。西ローマ帝国滅亡以後、330年ローマ帝国の新都となったコンスタンティノープル（現在のイスタンブール）は「第二ローマ」と呼ばれました。1453年にコンスタンティノープルがオスマン帝国に陥落し、正教会の中心は事実上モスクワに移され、世界の東方正教会信者2億5000万人の3分の2を占めるロシア正教会が「第三ローマ」を主張します。東西の教会は1964年、ローマ教皇パウロ6世と東方正教会のコンスタンティノープル総主教アテナゴラスが会談し、2014年に教皇フランシスコとコンスタンティノープル総主教バルソロメオス1世が統一への共同宣言に署名しました。2016年2月には、教皇フランシスコとキリル総主教が、ローマ教会と東方正教会が分裂してから1000年ぶりにキューバのハバナで会談します。

戦争終結のための外交努力には、国際諸宗教組織としてのWCRPのネットワークを駆使した諸宗教外交が必要です。WCRPは、ウクライナ正教会の独立を承認したコンスタンティノープルのエキュメニカル総主教次席エマニュエル府主教を国際共同議長に迎え、ロシア正教会キリル総主教との関係においては同じく次席のヒラリオン府主教との繋がりがあります。緊急人道支援や宗教指導者による停戦に向けた働きかけを継続するとともに、世界宗教史の歴史的現在に基づき、ギリシャ正教、ロシア正教、ウクライナ正教各派の代表を含めた緊急対話の場を設け、停戦、終戦を早期に実現するための諸宗教外交を展開することが求められています。

学習会「ウクライナ危機の打開に向けて」様々な信仰を持つ市民の行動と連帯」の開催

WCRP日本委員会は4月9日、WCRP/RfP国際トラスティーズ・日本グループと国際自由宗教連盟（IARF）日本チャプターとの共催で、ウクライナ危機に向けたオンライン学習会を実施した。これに約500人の信仰を持つ市民やNGO、メディア関係者が参加した。

開会挨拶の中でWCRP日本委員会の黒住宗道理事（黒住教教主）は、この会合の趣旨について、「現在のウクライナ情勢や和平に向けた国際社会の動向について学び、また宗教界の動きを概観しながら、信仰を持つ私たちのできる実践について話し合いたい」と述べ、私たち一人ひとりの実践に向けた学習の機会にしたいと語った。



植木安弘教授の基調講演

「ウクライナ危機への国際

社会の対応と市民の役割」と題し、上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科の植木安弘教授が基調講演を行った。植木教授は、ロシアのウクライナ軍事侵攻は、国家主権の尊重、紛争の平和的解決、武力による威嚇を行わないという国連憲章で規定されている規範や原則を無視し、戦後の国際秩序を根底から揺れ動かすものであると語った。そして、これに対する国連の対応について説明した。常任理事国のロシアによって安全保障理事会が十分に機能しない一方、緊急特別総会が開かれ、ロシア非難や即時停戦要求が賛成141カ国によって決議されたことや国際司法裁判所がウクライナの訴訟を認め、仮保全措置を命令したこと、国連人権理事会が人権調査委員会を設立したことなど、国連による和平努力について説明した。また国連の課題についても言及し、安全保障理事会の改革や総会の権限強化、そして核兵器や化学兵器などの大量破壊兵器への対処の問題点を指摘した。そして、市民の役割として、難民や避難民への大規模な支援活動や国際機関や赤十字などへの資金援助、祈りの集いなどの精神的サポート、ソーシャル・メディアによる適切な情報発信、難民受け入れなどの活動をあげ、市民の役割の重要性を強調した。

この後、ウクライナで宗教活動に取り組む日本山妙法寺の寺沢潤世僧侶によるロシアの軍事侵攻直後の現地の様子が、録画に

よって報告された。続いて行われた「諸宗教パネルからの応答」では、WCRP/RfP国際トラスティーズ・日本グループの田中常隆代表、WCRP/RfP国際委員会の杉野恭一前副事務総長、IARF日本チャプターの杉山利予氏が報告した。杉野恭一前副事務総長は、このウクライナ情勢に取り組み宗教者の役割として、実際に行われている戦争を即時停戦に導くための取り組み、大規模な難民支援の実施、そして恒常的な和解のための取り組みをあげ、国際的な宗教者の実際的な取り組みや今後の可能性について語った。



黒住宗道理事の開会挨拶

びかけた。

識を持ち、我が事として捉え、自分のできることを実践する重要性を述べ、これからの継続的な行動を呼びかけた。

人身取引防止スタディツアー〜海外編〜

人身取引防止タスクフォースは3月26日、「人身取引防止スタディツアー〜海外編 Part2〜」をオンラインで開催した。2021年7月17日にWCRPフイリピン委員会と共催で行った学習会に続いて2回目の開催となる。『インドネシアから学ぶ人身取引』をテーマに国内外の宗教者ら約100人が参加した。今回は、WCRP日本委員会とWCRPインドネシア委員会の共催、ルマ・ハラパン（GMIT）の協力によるもの。

総司会を小宮山延子師（カトリック）が務め、同タスクフォースの宍野史生責任者（扶桑教管長）が開会挨拶を述べた。

続いて、インドネシアで人身取引の問題に取り組みプロテスト教会を母体とした団体「ルマ・ハラパン」の活動を映像で紹介。地域で女性や子どもへの暴力事件が多発していることから、2018年に同団体を立ち上げ、警察、政府、教会と連携し



エステル・マンタオン氏

ながら被害者保護や支援を行っている。また、雇用先の劣悪な環境による自殺者や雇用主からの暴力により亡くなった出稼ぎ労働者の

遺体を故郷へ送り届ける取り組みも紹介された。

次に、被害者のパーソナルヒストリーとして20代女性の経験が映像で語られた。彼女は小学校卒業後、出稼ぎ労働者を斡旋する仲介人の勧誘でマレーシアに行き、9年間の無給労働を強いられた。雇用主からの暴力や脅しも絶えず、故郷に帰りたいと相談しても、取り合ってもらえなかった。さらに、携帯電話も取り上げられ、故郷や外部との連絡を取る手段が絶たれていた。その後、新たに雇われた家政婦へ相談したことをきっかけに、警察や大使館へ助けを求め、彼女は救出された。帰国後も、マレーシアに女性を送った仲介人の家族からパスポートや預金通帳を盗まれるなど詐欺被害に遭ったことが語られた。インドネシアでは、このような二重被害に遭う労働者が多くいるという。女性が被害届を提出したことで、仲介人の家族は実刑を受け、昨年11月に彼女はルマ・ハラパンに保護された。

このあと、タスクフォースメンバーによるインタビュートとして、加瀬育代氏（立正佼成会）が登壇。同団体の弁護士をしているエステル・マンタオン氏が回答した。

続いて、参加者はグループワークを行い、感想を共有した。「インドネシアのことは遠い国の話だと思っていたが、学んだことで身近に感じられた」「二重被害に遭われる方がいるのを知って心が痛んだ。知ることから始まる支援もあると伺ったので参加できてよかった」といった感想が寄せられた。

最後に、ヨハネス・ハリヤント神父（WCRPインドネシア委員会議長）が開会挨拶を述べた。

青年部会 公開学習会開催

青年部会は3月5日、『心と社会のバリアフリー〜見えない壁が見えてくる〜』をテーマに公開学習会を開催し、青年部会幹事、関係者など50人が参加した。

青年部会は「誰一人取り残さない」をスローガンに掲げる国連持続可能な開発目標（SDGs）に取り組んでいる。今回は、「人や国の不平等をなくそう」（SDGs 10）や「住み続けられるまちづくり」（SDGs 11）に焦点を当て、障がい者とともに暮らす社会づくりをめざし、社会のバリアフリー化などについて話し合われた。司会は眞壁希予幹事（立正佼成会総務部渉外グループ）が務めた。冒頭、八坂親准幹事（中山身語正宗青年本部長）が開会挨拶を述べ、NPO法人障害平等研修フォーラムによる「障害平等研修



©障害平等研修フォーラム
車イスに乗った女性の絵

（DET）が行われた。演習やグループワークのファシリテーターは障がい者が務めた。メインファシリテ

ターの谷内孝行氏（桜美林大学准教授）は、「障がいとは何か」「障がいはどこにあるのか」を参加者へ問いかけながら演習を進行。参加者は、車イスに乗った女性の絵や障がい者が多数派であるパラレルワールドへ主人公が移動する映像から、障がい者が日常生活で直面する問題を知り、障がいとは当事者が持つものだけでなく、社会にある障壁も障がいであると体感した。

続いて谷内氏は、多様性のある共生社会を作り上げる行動として、社会環境を変え、その重要性と、当事者の声をきくことの大切さを強調。その後、参加者はグループワークで身の回りの現状を分析し、「聴覚障がい者が困っていたら、スマホのメモで対応する」など、身近でできる具体的な実践を考え、発表した。

DEETの最後に、谷内氏は『法律から捉える「合理的配慮」をテーマに、障害者差別解消法について解説。「合理的配慮」とは、社会的障壁による機会の不平等をなくすため、障がい者と話し合いながら障壁の除去に努めることで、行政機関等のみに法的義務となっていたが、法改正により民間事業者も義務化されたと説明した。最後に、小林隆真幹事（比叡山延暦寺）が閉会挨拶を述べ、学習会を終えた。

参加者からは「ファシリテーターが障がいを持つ方だったので、空想的な話にならず、現実味のある体験や実践を知ることができた」「障がい者に何かしてあげる、ではなく自分が変われば価値観やできることが

大きく変わることが少しわかった」などの感想が寄せられた。

青年部会「CommunityHeartプロジェクト」 第4回プログラム「わたしと社会」

第4回 CommunityHeart コミュニティプログラムが、4月9日に開催された。今回は「女性と社会」「女性の生き方」「諸宗教の女性観」の三つのセッションから、女性が抱える課題や自分らしく生きること、女性の尊厳に着目し、ディスカッション等をおこなう参加者一人ひとりが自分自身と向き合った。

歴史を振り返ると、現代以上に女性が自由を享受できる時代はなかった。しかし、自由であるが故の悩みがある。また、依然としてあるステレオタイプの女性像に縛られ、自らの可能性に制限をかける女性も少なくない。



インタビュー動画に出演した性善寺の柴谷宗叔師

「女性の生き方」では、5人の女性へのインタビュー動画を収録した動画を紹介。専業主婦で2児の母、国際的キャリアを積み国際結婚をした人、結婚に



神道の女性観について語る櫻本坊の巽安寿師

拘らず仕事に生きがいを持つ人、結婚して里子を迎えた人、男性であることに違和感を感じた女性になった人など、それぞれ



分かち合いの時間をたっぷり取りました♪

イスラームの女性宗教者が登壇し、各宗教において女性が表現するものや立場について紹介した。参加者は「女性がとても大切にされていることがわかった」「女性宗教者はマイノリティだが、可能性を感じた」「それぞれの宗教に女性だからこそ重要性があった」と感想を発表した。

「タケノコ掘り」を開催

気候危機タスクフォースは4月2日、埼玉所沢市にある里山を会場に「タケノコ掘り」を開催し、日本委員会関係者とその家族など多くの子どもたちが参加した。

同タスクフォースは2017年から、地元「堀口天満神社周辺緑地を守る会」と協定を結び、約1万㎡の山林で、「WCRPのちの森づくり」プロジェクトとして里山再生事業に取り組んできた。これまで、堆積竹の焼却や園路整備、植樹と定期的な下草刈りを行うことによって、本来の里山の姿を取り戻しつつある。

今回の「タケノコ掘り」は、新型コロナウイルス感染症の影響により3年ぶりの開催となった。タケノコを掘るといふ作業を楽しみながら取り組んでもらうことにより、森の整備を行うことができる。また、この森づくりを通して、次世代を担う青少年の



タケノコ掘ったよ



掘り上げたタケノコを掲げる園田師

環境意識の高揚を図るといふ目的がある。

同タスクフォース運営委員で秩父神社宮司の園田稔師があいさつの後、タケノコの掘り方の講習を兼ねて試し掘りを行い、園田師が掘り上げると参加者からは「おーっ！」との歓声が上がった。

参加者は春の陽気の中でタケノコ掘りに汗を流し、「タケノコ、見つけた」「いっぱい掘れた！」と元気な声が里山に響き渡った。

閉会にあたり、同タスクフォースメンバーで立正佼成会調布教会長の田爪希依師があいさつに立ち、「タケノコ掘りの大変さを体験し、日ごろ食卓でいただく食べ物のありがたさをあらためて実感しました」と述べた。

今回の「タケノコ掘り」には37人が参加し、約50本のタケノコを掘り上げた。

シリア難民留学生受入れ事業

5期生来日

2016年度より認定NPO法人難民支援協会（JAR）と共同で「シリア難民留学生受入れ事業」を実施してきた。

この事業は、シリア国内の内戦により、難民を最も多く受け入れているトルコで高校卒業の資格を持つ学習意欲の高いシリア人青年を対象に公募し、関係各省庁とも調整、協力の上で実施している市民社会主導による難民受け入れ事業だ。

現在は、パスウェイズ・ジャパンがその事業を引き継ぎ、活動を展開している。2016年度の事業開始から、これまで24人を受け入れてきた。

そして、今年3月下旬、本事業の5期生となる留学生7人が来日した。

5期生は、新型コロナウイルス感染拡大やその水際対策により、1年以上の待機期間を経ての来日となった。

今後は日本語学校に通い、進学や就職を目指す。WCRP日本委員会は、共同実施団体として、5期生の日本語学校卒業まで様々な支援を行う。

平和研究所 第9回研究会

西原廉太副所長

平和研究所の第9回研究会が3月29日、オンラインで開催され、西原廉太副所長(立教大学総長)が『ロシアによるウクライナ侵攻とその背景にあるキリスト教』をテーマに発表した。

はじめに、ウクライナをめぐる教会史的論点の再確認として、2018年12月にウクライナ正教会がロシア正教会から独立するまでの歴史を振り返った。

そのうえで、2009年2月にモスクワ総主教として着座したキリル1世(ロシア正教)の標準的な考え方は、「ロシア、ベラルーシ、ウクライナの国家は同じものである。その中心はモスクワにあるとなる。この見解は、(ウクライナ侵攻直前の)ロシアのプーチン大統領の言葉と見事に重なる」と述べた。



西原副所長

しかし、ウクライナ正教会側としては、「ロシア人とウクライナ人は異なる民であり、それぞれが独立した教会を形成することが正しい」と考えている」と語った。そのため

に、プーチン大統領はウクライナ正教会を、「ロシア人とウクライナ人の精神的統一に対する攻撃」と位置づけているとし、「プーチン大統領は『ウクライナは我々自身の歴史、文化、精神的空間の譲れない一部』だと明言している。これこそが彼の精神的空間であり、千年以上にわたるロシアの宗教学に根差した言葉である」と述べ、プーチン大統領の行動の背景を示した。

こうした二つの「異なる正教の考え方」が存在する以上、ロシア軍のウクライナへの侵攻・紛争を解決するのは、「共通の歴史的運命」を持つロシアとウクライナの人々以外にはないのではないかと語った。

一方で、ロシア正教会の司祭らが、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻の即時停止と和解を求める公開書簡を発表し、「ウクライナの兄弟姉妹が不当に受けた試練を嘆く」として、3月8日までに長司祭や司祭ら286人が署名したという情報なども紹介した。

平和研究所 令和4年度第1回研究会

ホアン・マシア所員

令和4年(2022年)度の第1回研究会が4月19日、オンラインで開催され、ホアン・マシア所員(元上智大学教授)が『教皇フランシスコ「われわれ皆兄弟」にみる

B) 教皇フランシスコ著『Fratelli tutti』における戦争反対論

* これに続いて(今回の発表でとりあつかう予定だったのは)、次の点でした。

フランシスコによると、和解を妨げるものすなわち被害を引き起こすおそれや憎み合いおよび暴力の連鎖に火をつける復讐の精神に対して「傷をいやす記憶」healing memoryの過程を定める必要があるということです。

MEMORY: "...Someone, by a free and generous decision, can choose not to demand punishment, even if it is quite legitimately demanded by society and its justice system--However, it is not possible to proclaim a "blanket reconciliation" in an effort to bind wounds by decree or to cover injustices in a cloak of oblivion--The Sho must not be forgotten--Nor must we forgive the atomic bombs dropped on Hiroshima and Nagasaki--(246)

マシア所員のレジュメから

戦争反対論』と題して発表した。マシア所員はまず、教皇フランシスコの「われわれ

はカインとアベル物語の教訓を忘れてしまった」という復活祭のメッセージと、聖書にある「カインは弟アベルに襲い掛かって、彼を殺した」という言葉を紹介。ロシアのウクライナへの軍事侵攻は、「昔からの戦争の教訓を忘れてしまった人類の、大きな忘れもの」が原因であると訴えた。

そして、「人類はみな兄弟姉妹。社会的な友愛と、違う者との出会いを目指し、あらゆる葛藤的対立に対して、あくまでも対話による解決を歩みたい」と明言。さらに教皇フランシスコの「平和とは『作り出すもの』であり、誰もがそれに関与し、その役目は終わることはない」(Fratelli tutti, nn. 227-232)」という言葉を引用しながら、「宗教者の役割はこの言葉がすべて示している」と語った。

また、和解を進めていくには「ゆるし」が必要だけれども、それは「忘れること」ではないという「ヒーリング・メモリー」

